

## 民俗学と文献史学

赤嶺 政信  
(琉球大学名誉教授)

刊行予定の「琉球文学大系」の中には、文学を生み出す社会的背景としての琉球史に関わる、例えば『球陽』等の文献史料も含まれている。小稿では、主として文献史料に依拠する文献史学と筆者が専門とする民俗学の関係について雑感を述べたい。

柳田国男の民俗学はアンチ文献史学という性格を有していたが、かといって柳田が文献史料の活用を否定したわけではなく、柳田自身、同時代の並みの歴史学者以上に文献史料に通じていたことは間違いない。1960年代以降に盛況となる沖縄の民俗研究は、機能・構造主義に依拠した社会人類学が主導したこともあって、小川徹や平敷令治などの少数の例外を除いて、文献史学との交流は概して乏しかったという印象が強い。そういう状況のなかで、文献史学の立場から民俗学や民族学による沖縄研究を批判したのが安良城盛昭の『新・沖縄史論』(1980)所収のいくつかの論考と、日本民族学会の機関紙である『民族学研究』に掲載された高良倉吉の「琉球史研究からみた沖縄・琉球民俗研究」(1996)であった。

ここでは高良の論考を紹介すると、高良は、ノロ制度は古琉球においては国王の名によって発給された辞令書を通じて維持・運営されていたこと、住民の生活母体であるシマは、首里王府が設定した間切・シマ(近世では間切・村)制度を通じて末端の行政単位として位置づけられていたこと、稲・麦などの主要な農耕儀礼の日選が王府によって行われ、その実施について

も王府が地方に通達していたことなどに注意を喚起しつつ、地方の民俗を検討するにあたり、それらの事象の背後にある王国制度に対する配慮が従来の民俗研究には足りなかったのではないかと指摘している。

高良や安良城の批判を踏まえて沖縄の祖先祭祀の民俗に注意を向けてみよう。『沖縄大百科事典』の「祖先崇拜」についての解説には、「奄美、沖縄の固有信仰の核に祖先崇拜ないし祖先祭祀を有している」という一文が見られるが、以下で見るように沖縄の祖先祭祀の民俗は、近世の王府の宗教政策を考慮に入れないと、肝腎な点を見誤る結果になる。

『球陽』巻16 尚穆王30(1781)年の記事を参照すると、伊計村(現うるま市)では、1781年時点で家に神主(位牌)がなく、忌辰(死者の命日)や節祭の際に祖先に対する祭祀が行われておらず、さらに盆行事もなかった状況のなかで、下知役に任命された名嘉村親雲上という人物が、伊計村に通って人々に祖先祭祀の重要性を説き、さらに、名嘉村が自腹で位牌71セットを準備して村人に分け与えた結果、お盆等の祖先祭祀の行事が始まったことがわかる。従って、沖縄の祖先崇拜を沖縄の固有信仰とするのは誤りであり、儒教を政治秩序の根幹に据える王府の政策によって祖先祭祀が成立していく側面に注意を向ける必要があることになる。

「琉球文学大系」の刊行事業が、民俗学と文献史学さらには文学研究との連繫を促進する契機になることを切に期待したい。

## 佐佐木信綱と沖縄

屋 良 健 一 郎

(名桜大学国際学群上級准教授)

「夏は来ぬ」の作詞者として知られる佐佐木信綱は、近代を代表する国文学者・歌人である。研究者としての仕事では『校本万葉集』出版が挙げられる。数多くある万葉集の写本を突き合わせ、文字の異同を示した書だ。橋本進吉らと共に12年の歳月をかけて行われたこの事業は、印刷を終えて出版を控えていた1923年9月、関東大震災という悲劇に襲われる。製本所にあった印刷済みの500部も、東京帝国大学に置いてあった原稿や関係資料も震災による火災でことごとく焼失してしまったのだ。この事業に心血を注いできた信綱は、焼失を知って脳貧血を起こしたという。だが、幸いなことに、校正刷り2部が信綱の家と武田祐吉の家にそれぞれ残っていることが判明、その校正刷りをもとに1924年から翌年にかけて出版が行われた。

こうして、万葉集研究の画期と評される『校本万葉集』が誕生したのである。この出版が、その後の研究の進展をもたらしたといわれる。私自身は万葉集の研究者ではないため、同書を利用したことはない。だが、専門分野は違えど、信綱の長年にわたる研究の積み重ねと、出版に費やした12年という歳月を思うと、先人たちが研究環境を整えてくれたおかげで今の研究がある、そのことのありがたさに改めて気付かされる。

万葉学者の印象が強い信綱だが、『近世和歌史』（博文館、1923年）という著書もある。そしてこの本で、わずか1頁だけだが琉球に触れている箇所がある（229頁）。短い記述ではあるものの、山本春正（17世紀の歌人）の教えが琉球に及んだことを指摘している点は注目される。1980年代に池宮正治によって、琉球の官人が山本春正の添削を受けたことが明らかにされるが（『近世沖縄の肖像上』ひるぎ社、1982年）、春正と琉球とのつなが

り自体は信綱も早くに述べていたのだ。

実は、信綱は沖縄にある程度の関心を持っていたと思われる。信綱選歌の『国民歌集』（民友社、1909年）には琉球人の和歌が2首収録されている（読谷山朝恒と浦添朝憲の作）。また、信綱が弟子の尚文子（井伊文子）の歌集『中城さうし』（表現社、1936年）に寄せた序文によると、信綱は平敷屋朝敏の「苔の下」を読んだことがあるらしい。

信綱の蔵書には沖縄に関わるものも数点含まれていた。よく知られているのが、現在「天理本琉歌集」と呼ばれる『琉歌集』である。この書を古書店で入手した信綱は鑑定を伊波普猷に依頼、伊波による解説が竹柏会（信綱主宰の短歌結社）の雑誌『心の花』1932年8月号に掲載された。また、英王堂本『おもろさうし』も所持していた。言語学者バジル・ホール・チェンバレンが沖縄を訪れた際に西常央の所蔵する『おもろさうし』を書写させたものである。英王堂本『おもろさうし』はチェンバレンから上田万年の手に渡り、上田の死後、信綱が購入した。同書については末次智『琉球の王権と神話』（第一書房、1995年）273頁～281頁に詳しい。

信綱は沖縄を訪れることはなかったが、研究者・歌人としての彼の視野には沖縄が収まっていた。1960年に次のような歌を詠んでいる（『老松』所収）。

憤りなげき愁ひの歌さはなる沖縄人に <sup>さきはひ</sup> 幸よ  
<sup>あも</sup> 天降れ

「さは」の漢字表記は「多」。戦後の沖縄歌人の短歌には怒りや嘆きが多いと感じた信綱は、沖縄の人の幸せを願ってこの一首を詠んだのである。

## 2022年度 上半期業務報告

(4月～9月)

### 「琉球文学大系」サテライト事務局（琉大地域創 生総合研究棟2階）開設

4月1日（金）に宮城一春、前里貴史両名が「大系サテライト事務局」職員の辞令を受け、琉大構内「地域創生総合研究棟」2階に開設された編集業務の拠点となる事務局に新たに配置され、組織体制の強化が図られました。

### 次年度刊行予定の巻別会議、相次ぎ開催

次年度刊行予定の巻別会議が大系サテライト事務局（琉大構内）の研究棟会議室で開催されました。4月14日（木）には、次年度6月刊行『琉球民俗関係資料』（4）の巻別会議が校注者4名（山里純一、赤嶺政信、上原孝三、平良勝保）各委員を集め開催され、4月19日（月）には次年度9月刊行『琉球史関係資料』（1）の巻別会議が校注者3名（田名真之、麻生伸一、山田浩世）各委員を集めて開催されました。翌5月30日（月）には次年度12月刊行『琉歌』（中）の巻別会議が校注者2名（前城淳子、石川恵吉）各委員を集め委員長、副委員長、事務局スタッフも加わり編集巻別会議が行われるなど、4月に開設された大系サテライト事務局が大いに活用されました。

### 『組踊』（上）の編集作業（1回目の合宿）

本年9月刊行に向けた第2回配本『組踊』（上）の編集作業が、那覇市内コンドミニアムを拠点にして合宿形式で行われました。同合宿は波照間委員長を中心に事務局スタッフと瑞木書房・小林基裕氏も加わり、7月30日（土）から8月6日（土）まで、2回目の合宿のための下準備として行われました。

### 第1巻『おもろさうし』（上）の発売記念トークイベント開催

本年3月に刊行された第1回配本『おもろさうし』（上）発売記念トークイベントが、8月21日（日）午後那覇市内のジュンク堂那覇店地下イ

ベントホールにおいて開催されました。トークイベントは、店頭販売を担うジュンク堂書店の要請に応え『おもろさうし』を話題の中心に据え、執筆（校注者）の波照間永吉委員長に対し、大城道子氏（専門：女性学）が質問を投げかける形で行われ、進行はサテライト事務局（宮城一春）が担当しました。



トークイベントの様子=8/21、於ジュンク堂那覇店

### 『組踊』（上）編集追込作業（2回目の合宿）

標記校了までのタイトな日程をクリアするため、編集追込をかけて那覇市内コンドミニアムを拠点に2回目の合宿が9月1日（木）から9月12日（月）まで行われました。同合宿には校注者（鈴木耕太、西岡敏）各委員も加わり、コンドミニアム合宿先には最大7名がガラ編集校正作業に当たりました。合宿8日目の9月8日（木）からは場所を南風原（沖縄高速印刷）に移し、缶詰状態で追込をかけましたが、週明けの9月12日（月）に校了がずれこみ、最終修正が完了したのは9月14日（水）午後となり、ゆまに書房の協力も得ながら9月末の刊行に間に合わせる事が出来ました。



最終校正作業の様子、於沖縄高速印刷

## 組踊と私 一屋部の「八月踊り」をとおして一

私の生まれ育った名護市字屋部は、古くから手踊りエイサーや豊年祭などの芸能が盛んな地域である。特に豊年祭「八月踊り」は毎年村を挙げて盛大に執り行われ、正日の道ジュネーでは区民だけでなく、近隣の小・中学校の生徒や保育園の園児たちがこぞって街頭に集まり、人だかりが出来るほど多くの人びと（シマンチュ）から愛されている一大行事である。

そのような環境下に育った私は幼い頃から「八月踊り」が楽しみで、この季節がやってくるのを心待ちにしていた。中でもとりわけ幼少期の豊年祭の思い出といえば、“家に帰りたい家族” vs. “まだまだ組踊鑑賞を楽しみたい私” のバトルである。「もう帰ろう」「あと少しだけ」の問答で第二幕あたりまで粘るのだが、最終的にはしびれを切らした親に、半ば強引に家に連行されるという結末がお決まりであった。

それ程に私を釘付けにした組踊の魅力は、立方と地謡の掛け合いにあると思う。私はそれを大学1年生の時に立った初舞台「久志の若按司」の天願の若按司の思妹役・乙鶴を演じた時に、直に肌で感じる事が出来た。

家臣・謝名の大名のたまし討ちに遭い親を殺された兄妹が、従兄にあたる久志の若按司に助けを求めるため山道を忍び歩く場面で、乙鶴の悲しみ・怒り・恐怖・不安といった感情を上手く表現出来ずにいると、教師から「歌を聴きなさい」と一言声をかけられた。その言葉通り、これまでの自分の役作りを一度真っさらにして歌を聴いてみると、自然と乙鶴の気持ちに引き込まれて唱えの響きの重さが全く変わったのである。そして、その響きに応えるように歌唱が重なり、お互いが共鳴することで観る者を物語の世界へぐっと引き寄せていくのだと感じた。また、その掛け合いはその日の舞台や客席の雰囲気によって変わり、一度として同じ掛け合いは生まれぬ所もとても面白い。まさに“舞台はナマモノである”という言葉の意味を体感した。

そんな組踊の魅力を、これからも一村踊りに携わる者として誰かに伝えることが出来ればと思っている。

(比嘉緋南／大系大学事務局)



### 「琉球文学大系」新規関係委員の紹介／事務局職員の人事異動—2022年4月

本事業の関係委員に、このほど松永明氏（駒場東邦高等学校教諭）、比嘉吉志氏（名桜大学環太平洋地域文化研究所共同研究員）が新たに加わりました。松永氏は第3巻『混効験集』、比嘉氏は第28・29巻『琉球史関係資料』（1・2）を担当します。また、新規事務局職員として仲榮眞修（地域連携研究推進課長）、宮城一春・前里貴史（大系サテライト事務局）の3名が加わりました。

### 「琉球文学大系」関連記事目録—2022年4月～2022年9月

琉球新報「琉球文学大系 第1巻発刊「おもろさうし・上」651首収録」（4月1日付）

沖縄タイムス「琉球文学1巻 名桜大が発刊「おもろさうし 上」」（4月3日付）

琉球新報「金口木舌」（4月6日付）／沖縄タイムス「大弦小弦」（4月24日付）

琉球新報「〈社説〉施政権返還50年②アイデンティティー 公教育にしまくとぅばを」（5月2日付）

沖縄タイムス「琉球文学大系（全35巻）第1巻「おもろさうし上」発刊「謡われるオモロ」配慮 初心者親しめる注釈書」（6月8日付）

新潟日報「古典や史書収録 琉球文学大系（全35巻）刊行が始まる」（6月17日付）他 地方紙15社（掲載日各個）

國學院大學学抜 No.714「田島利三郎の業績—『おもろさうし』の発見」（7月20日付）

図書新聞 3554号「琉球文学研究の礎を築く待望の大系化『琉球文学大系 全35巻』（ゆまに書房）刊行に寄せて」

4面1頁モノクロ版〈波照間永吉、工藤隆、遠藤耕太郎〉（8月6日付）

琉球新報「琉球文学大系1 おもろさうし上「型」身につけ言葉の旅へ」（8月7日付）

琉球新報「「後生のため やるべき仕事」那覇「琉球文学大系」刊行記念トーク」（9月1日付）

週刊 読書人「『琉球文学大系』（全35巻、ゆまに書房）刊行開始」

8面1頁カラー版〈波照間永吉、山本貴光、西岡敏〉（9月23日付）

〔事務局だより〕本事業に対しこれまで継続して応援下さっている伊差川則子氏より、今後の編集刊行事業推進を願うお心尽しの品が、「大系」事務局に届けられました。記して、厚くお礼申し上げます。

### 各巻担当委員の皆様へ 令和4年度 全体会議（編集・執筆者会議）開催について

標記全体会議開催を下記日程で予定しており、後日各委員に対し下記期間での出欠確認等のご連絡を差し上げます。なお、開催通知は各委員への日程調整を経て、決定後に改めてご案内いたします。

開催予定日程：2023年1月22日（日）～2月1日（水） 開催場所：琉大構内会議室